

『友達』 - かし

※お読みいただく際はブラウザの横サイズを調節してください。より快適にお読みいただけます。

「私たち親友よね」
美紅は突然そういった。
「もちろんよ」
私たち二人はすぐに返した。
美紅は変に真剣な顔をしていた。ただ、美紅の家に遊びに来ただけのつもりだった私たちには、どうしていいかわからなかった。
「どうしたの美紅？ 改まって、何か言いたいことでもあるの？」
「ええ」
私が明るく尋ねても、美紅は真剣な表情を崩さなかった。
「真面目に聞いてほしいの」
美紅の強い口調に、私たちは黙ってしまう。
「え、何？ いったいどうしたっていうの？」
一体どうしたというのだろうか？ わけがわからない。
仕方なく真剣な表情を作って、美紅と向き合う。
「聞いてあげるから、話してみてよ」
「実は私、未来が見えるの」
私たちは言葉を失った。次の瞬間には笑いが込み上げてきた。
「面白くないわよ、そんな冗談」
笑いながらそう答える。しかし、二人を余所に美紅は硬い表情のままだった。
「勿論、いきなり信用してもらえとは思って無かった。今から証明してあげるわ。ちょっとの間、貴方たちにも未来が見える様にしてあげる」
美紅は手のひらを差し出した。
「おでこを出して」
私たちは言われるがまま、おでこをグイと突き出した。
美紅はそれぞれのおでこに両手をぺたりとくっつけた。
「目をつぶって」
言われたとおりにする。何も見えるはずがない。未来が見えるなんてそんなSFが起こるはずない。そう思っていた、けれど私の常識はあっさりと砕かれた。しばらくすると、頭の中にぼんやりと映像が浮かんできた。今の自分たちの姿だった。
「私たちは家を出る。そして近くの自販機で缶コーヒーを買う、そのコーヒーの製品番号は6111524であり、さっき見た通りだと驚く。」
美紅がおでこから手を放した、するとそこで映像は途切れた。
「今のは何？ 自販機で缶コーヒーを買ってたわ。栞里、あなたにも見えた？」
横を向いて顔を見ると、彼女はごくりと唾をのみこんで首を縦に振った。
「じゃあ、行くわよ」
突然美紅は立ち上がった。
「どこ行くの？」
「決まってるじゃない、今見た未来を確かめに行くのよ」
私たちは黙って彼女の後をついていった。未来が見えるなんて馬鹿げている、さっきまではそう考えていた。しかし、あんなものを見せられてはあながち冗談とも思えなくなってきていた。自販機の缶コーヒーだけなら細工することが出来るかもしれない。だけど、特定の二人の人間に同じ映像を回想させることなんてできるだろうか？
「ここね」
美紅は自販機の前で立ち止まった。
缶コーヒーを買うだけ、ただそれだけなのに、私たちはものすごく緊張していた。
美紅がお金を入れ、ボタンを押し、缶コーヒーが出てくる。それを取り出し皆で製品番号を覗き込む。番号は6111524だった。声が出なかった。しばらくコーヒーをじ

っと見ていた、

「ちょっと貸して」

私は美紅の手からコーヒーを半ば奪い取る様に受け取ると、眺めてみたり、目を近づけて見たり、掌の上で転がしてみたり、怪しい所を撫でたり、念入りに調べた。シールか何かか貼られていないか、隠し持っていた別の物と入れ替えられていないか、入念にチェックした。シールは貼っていなかったし、温度は冷たく、美紅が持っていた部分だけ暖かくなっていた。すり替えたのなら、こんなに冷えてはいないだろう。美紅は冷蔵庫には立ち寄ってないし。

「本物って事？」

私はおずおずと美紅の方を向いた。

彼女は静かに、しかし、しっかりと頷いた。

「もし冗談だったら、それこそ友達じゃないからね」

彼女はもう一度頷くと、

「とりあえず、家に戻りましょ」

と言って、来た道に戻りだした。

足が動かなかった。

栞里はどう思ってるんだろうと、横にいた栞里の方に顔を向ける。

口の端は不自然に吊り上り、目は大きく見開いていた。その表情から私は彼女の心境をうかがい知ることはできなかった。有り得ないことを目の前にして驚いている様にも見えたし、喜んでる様にも見えた、恐怖で顔が引きつっているとされてもなんら不自然ではない。

「美紅ちゃん、待って」

彼女はハッと我に戻ると、小走りで美紅を追いかけて行った。私もおいて行かれないように、歩き出した。

「美紅……」

私は正直、気味が悪いと思っていたし、変なことに巻き込まれないかと不安だった。

帰り道、美紅は何も喋らなかった、私も話しかける事はしなかった。

美紅の部屋に戻ってきた私たちは皆神妙な顔つきで座っていた。

最初に口を開いたのは美紅だった。

「どう思った？ 私が羨ましい？ 気味が悪かった？ それとも私の傍にいれば得が出来ると思った？」

「そんなこと……」

私は戸惑ってしまった。上手く返事が出来なかった。

「そんなの関係ないよ、美紅ちゃんは友達でしょ」

栞里だった。突然に話し始めたので私は少しびっくりしてしまった。

「確かに、美紅ちゃんが未来が見えるのは羨ましいし、少し不思議だなあとは思いますが、宝くじの当たり番号を教えてもらえたり、とかも思う。けど、美紅ちゃんは友達。そこは変わらないよ。私たちを信頼して打ち明けてくれた。そんな美紅ちゃんを嫌いになることなんてないよ」

栞里は正座のまま、前のめりになって、強い口調で言っていた。

「ねえ、美咲ちゃんもそう思うでしょ？」

「勿論よ。決まってるじゃないの」

いきなり、自分の名前を呼ばれて戸惑ってしまった。顔に出ていなかったらどうか？

「ありがとう」

美紅は一言そういった。たった一言だったけど、言った時のほっとした表情で彼女が言いたいことは伝わってきた。

「今日はそろそろ帰るわね」

私たちは美紅の部屋を出た。美紅の表情を見て、今日はもう解散した方が良かった。だって、今にも泣きそうで、でも皆に泣き顔を見られたくないのか、必死で我慢してたんだもの。

それにしても、栞里はすごい。私は戸惑ってしまったのに、躊躇うことなく、あんなにはっきりと言えるなんて。普段はぼーっとして何時もニコニコしてる彼女だけど、私よりもずっと強い芯を持ってるんだろう。

彼女が羨ましい。

A

次の日、私は普段通り学校へ行った。

どれだけ驚くべきことがあったにせよ、今日学校へ行かなければいけないことには変わりはない。

チャイムが鳴って先生が教室に入ってくる。今まで騒がしかった生徒たちはいっせいに静まり返る。私もおしゃべりをやめて席に着く。

そして、そこでふと気が付いた、栞里がいない。いつも、栞里が座っている席が、今日は空いていた。今日は欠席かもしれないな。美咲は生まれつき心臓が弱い、だから学校も度々休んでいた。そんなわけで、この日も私は深くは考えなかった。

一時間目の授業は数学。先生が黒板に数式を書いて説明していく、誰にでも解るよう、丁寧に、ゆっくりと。バカらしい、そんなもの教科書を読めば足りる事じゃないの。わからなかったら、その時にその箇所だけ聞きに行けばいい。そう思って、私は眠りについた。寝ている時間が一番無駄なのはお約束か、そんなことを考えながら。

「起立、礼、着席」

ハッとして頭をがばっと起こした。

先生の声に起こされると、一時間目が終わろうとしていた。放課が始まる直前に起きたのは我ながらナイスだ。

先生がいなくなると急に教室中が騒がしくなった。

早速おしゃべりを始めたり、トイレに行ったり、皆がそれぞれの時間を過ごす中、私は栞里に電話をかけるために携帯電話を取り出した。普段はいくら休んでいても電話をかけるなんて事はめったにしない。それほどまでに、彼女は良く学校を休んでいた。それなのに、何故今日に限って電話をかけるのか、それはさっきの見た夢が原因だった。

夢の中では栞里が担架に乗せられていて、救急車から病院に搬送される所だった。栞里は両手で心臓がある辺りをつかみ、眉をしかめ、目を強く閉ざして、苦悶の表情を浮かべていた。嫌に鮮明な夢だった。まるでその場所にいるかのように、壁の案内板から、かき分けていった人達の顔まで、しっかりと見えていて、思い出すことが出来た。栞里が運ばれた病院は栞里が良くお世話になっている病院で、私もお見舞いに何度か行ったことがある。だから、その時の記憶が基になっているのだろうけど、それにしたって私は救急の方に足を踏み入れたことなど殆ど無い。さっきの夢は想像で作りにしてはしっかりしすぎていた気がするのだ。

……もしかして予知夢？ 昨日の事があったせいか、妙なことを考えてしまう。

ブルルルル。

「もしもし美咲ちゃんどうしたの？ こんな時間に。」

「学校休んでいたから、ちょっと気になってね」

「そんなの良くあることじゃない、今日に限ってなにかあったの？ でも、ありがとう。電話してくれて、うれしいよ。今日は朝ちょっと体調悪くて、念のため休んだだけだから心配しないで」

「そう、それならいいの。ゆっくり休んでね」

「うん、ありがとう」

良かった、栞里は元気そう。内心電話に出なかったらどうしようかとびくびくしていた。所詮、夢は夢でしかないのだろう。

そして、何事もなく放課後になった。私は美紅と一緒に帰るために美紅を迎えに行った。

「美紅～、いる？」

彼女のクラスの扉から頭だけ出して呼びかける、しかし返事は返ってこなかった。

いつもなら私が行くのを待っていてくれて、「いるにきまってるじゃない、今日はこのまま帰り？」とか「ごめんなさい、今日は私、用事があるの」とか言ってくれるのに。

今日は彼女の姿がなかった。先に帰っちゃうなんて一度もなかったのに。今日は学校を休んだのかもしれない。昨日は元気そうだったけど。

「ねえ、今日って小林美紅さんって休み？」

「そういえば小林さんいなかったね～、休みじゃないかな。理由までは知らないけど」

まあ、クラスメートの認識なんてこんなもんだろう。休みかどうかを気につけ、理由まで知ろうとするのはごく一部の友達だけだ。

美紅は友達が多い方じゃないからなあ。まあ、何にせよ美紅は今日休みらしい。

今はまだ午後三時、天気は晴れ、女子高生が家に帰るのはもったいない。とはいえ、一人じゃ退屈だ、仕方がない今日はおとなしく帰るとしよう。そう決心して靴をはき替えに下駄箱へ行こうとした時だった。

ピリリリリ、携帯が鳴った。

誰からだろう？ 画面には小林美紅と書かれていた。

通話ボタンを押し、受話器を耳に当てる。

「もしもし、美咲？ 今からフォーチュンに来て欲しいの？」

「どういうこと？ 美紅、今日学校休んだんでしょ？ まさかサボリ？」

フォーチュンは私たちが良く行く喫茶店だった。さしてコーヒーがおいしいわけではないが、町中にあり、ランチのメニューが豊富なので良く利用していた。

「詳しい話は後でするから、だから来て、お願い」

声は必死だった。学校をさぼってショッピングをしているような人の声じゃなかった。そして、美紅の次の言葉が私の行動を決めた。

「栞里が危ないの」

私は大急ぎでフォーチュンに駆け付けた。ダッシュで電車に乗り、降りた後もダッシュで向かった。店内に入り、美紅を探してぐるっと見回す、見つけた。お店の角の他の客席から少し離れたところに美紅はいた。

「美紅」

彼女も気付いたらしく、こちらを向いた。

「とりあえず、座って」

私は言われた通りにした。私が口を開く前に、美紅が話し出した。

「ごめんなさい、栞里が危ないと言ったけど、急ぐことじゃないの。だから落ち着いて。私の言い方が悪かったわ」

とりあえず、今栞里が危ないとかでは無くして安心だ。

「今栞里はどういう状況なの？ ていうか、全部詳しく説明して」

落ち着けと言われても、落ち着けるはずがない。

「栞里は今、家で安静にしてるわ。何が危険かという、端的に言うなら、明日栞里の容態は急に悪化する。私が未来が見えるのは、昨日見せたわね。そういう未来が見えたの」

「そんな……、本当なの？ 何とかならないの？」

未来が見える、まだ疑う気持ちもあった。でも、わざわざ呼びつけたという事は何の根拠もなく冗談で言っているのではないのだろう。冗談にしていい話題でもない。

「なんとかするために貴方を呼んだのよ」

美紅は言った。

「なら私は何をすればいいの？ 栞里の心臓は生まれつきよ、今更どうこうなるものじゃないでしょう」

私は語気を強めた。そんな方法が有るはずない。そう思っていたから。

「私は未来が見える、それに未来を変えることもできる」

「いくら未来を変えたって栞里の病気がいきなり無くなるわけじゃない。そんな奇跡が起こる未来が作れるの？」

「奇跡を起こすのよ。奇跡と言っても、いきなりボンと病気が消えてなくなるわけじゃない。限りなく低い確率でしか起こらないことを起こす」

「どういう……こと？」

「まず、『明日栞里の容態が急変する』この未来をなくす。そのための行動を午前のうちを探しておいた。

本来なら栞里は今日、もう大丈夫と言って私たちと遊びに行く、それが原因で明日倒れる。だから、美咲には今から栞里の家にお見舞いに行って、今日一日栞里が外出しないように見張っていて欲しい」

「栞里がベッドの上で安静に出来るようサポートしてって事？ それだけでいいの？」

それで明日は大丈夫かもしれないが、容体が急変するという事はそれだけ危ない状況なのだろう。美紅のやっている事はその場しのぎに過ぎない。

「貴方はそれだけやってくればいい。それである程度時間が稼げるはず。その間に彼女の病気が治る未来を見つける。偶々飲んだ薬の組み合わせが、その病気に劇的に効いた、とか方法はあるはず。」

「大丈夫なの？本当にそんなことが出来るの？」

「私に任せて。風が吹けば桶屋が儲かるじゃないけど、見える未来と少し違った行動を取るだけで、驚くほど未来は変わるのよ。貴方は今出来る事をして、そうすればうまくいくわ」

美紅にも自信はないはずだ、それなのに、その時の美紅はとても頼もしく見えた。美紅の言う通りにすればいい、そんな気がした。

「それじゃあ、私は栞里の家に向かうわ。何かほかに有る？」

「最後に一つだけ、もし栞里の病気が良くなったら、この封筒を栞里に渡してちょうだい。その中には今後どうしたらいいのかが書いてあるから。絶対にその時までには開けたり、渡したりしちゃだめよ、未来が変わってしまうから」

変なことを言うなあ。自分で渡せばいいじゃない。でも、そう言われれば引き受けるしかない。私は漠然とした違和感を抱きつつ、封筒を受け取った。

「約束するわ。じゃあ、行くわね」

私はまた急いで栞里の家に向かった。さっきまで晴れていた天気は曇りになっていた。今日は一日晴れのハズだったのに。

栞里の家について、ベッドの横に座る。

「美咲ちゃん、今日は急にどうしたの？ お昼の電話もだけど、なんか変だよ？」

この質問は予想できた。だから、ここに来るまでに体のいい答えを用意しておいた。昼間の夢、栞里が苦しんでいる夢。そのことを話して、漠然と不安になってしまったんだと言った。自分でも馬鹿だと思う、そんな事あるはずないと思う。でも、気になったんだと。

そしたら、栞里は納得してくれた。何より友達が心配してきてくれたという事が嬉しくて、その理由など二の次なのだろう。やはり、体調は全然問題なく、余りに暇だったから一緒に喫茶店でも行かないかと誘いをかけようとしていたところらしい。

私は喫茶店に行こうという栞里をなだめ、部屋でおしゃべりしたりして過ごしていた。

栞里がお腹がすいた、何かおやつ食べに行こう、と言った。外に出すわけにはいかない、コンビニでなんかおやつ買ってきてあげるから、そう言って栞里に寝ている様に言った。

今日は美咲ちゃんなんか変だよ、栞里に言われてしまった。昼間の夢がね、どうしても心配なの。我ながら苦しい言い訳だった。

コンビニに行くために家を出た、雨が降っていた。気付かなかった。当然今日は晴れだと思っていたから傘なんて持ってきていない。ついてないわ、そう呟くと私はコンビニに走っていった。

コンビニから帰ると、栞里はスースーと寝息を立てていた。もう、大丈夫だろう。上着を脱ぐと、ベッドに腕を枕にして頭を乗けた。……疲れた。美紅はうまくやってくれているだろうか？ いや、うまくいってるに決まっている。だって、美紅は私

に行ったのだから『私に任せて』と。

まただ、またあの夢だ。気付かないうちに寝てしまっていたのか。目の前では美紅が担架で運びこまれていた。ただ、前回と違って今は苦しんでいない。死んだように横たわっていた。その時一瞬くらとしたかと思うと、目の前の景色が変わっていた。栞里は学校で笑っていた、美紅と楽しそうにお喋りしていた、天気は晴れだった。また変わった、今度は病院のベッドの上で上半身だけ起こして本を読んでいる。天気は晴れだった。また、今度は家のベッドで寝ている。また、また、また……。目の前の栞里はめまぐるしく変わっていった。

はっ、頭を急にもたげたせいか、頭がくらくらする。

「美咲ちゃん、大丈夫。急に飛び起きて、怖い夢でも見た？」

そうか、夢から覚めたのか。そこで、私は異変に気付いた。まだ、脳裏に栞里の姿が焼き付いていた、そしてその姿は刻々と変化していた。

「何、これ？ 夢じゃないの？ 何でまだ見えるの？」

気が狂いそうだった。頭が痛い。頭の中の栞里は苦しんでいたり、笑っていたり、寝ていたり、様々だった。でも、いつも天気は晴れだった、雲一つない快晴だった。

もしかして、一つの仮説にたどり着いた。これは……未来？ 普通なら有り得ないの一言で済ませられるだろう。でも今は違う。美紅は私たちに、実際に見せてくれた、未来が見えるという事を。昨日だってそうだし、今日も栞里が遊びに行くつもりだったことまで知っていた。私は栞里に未来を一度見せられた。その時の影響で今も見えてるんじゃないだろうか？ 証拠はある、美紅は言っていた、未来を、栞里が助かる未来を創ると。だから、私が見ている未来はこんなにも移り変わっている。そして、美紅の言葉によれば、天気はどの未来でも変わらない。人間の力で動かせるものじゃないから。

私が見ているのは未来なんだろうな。慣れてきたのだろうか、頭痛は少しずつ引いていた。

「大丈夫、美咲ちゃん？ 顔色悪いよ？ 雨に濡れたまま寝てたから風邪ひいてない？ ごめんね、私のわがままで」

「ああ、いや、大丈夫風邪なんか引いてないよ。飛び起きたからちょっとね」

「それならいいんだけど」

栞里は心底心配そうだった。自分のせいで誰かが傷つくのに耐えられない性質だからしょうがない。

「本当に何でもないから、そういえば今何時くらい？ 私どのくらい寝てたの？」

「もう七時だよ外も暗くなってきたし、そろそろ帰る？」

「うん、そうさせてもらうよ。今日はホントにおとなしくしててね、お願いだから」

「美咲ちゃんは心配のしすぎだよ、でもわかった。今日はおとなしく寝てる」

美咲はそう言って微笑んだ。この笑顔を見ているだけで栞里を助けなきゃという気持ちが強まる。

私は栞里の家を出た。しかし、家には向かわずに、近所のファミレスに向かった。道すがらこれからどうしようかと考えていた。

ファミレスに着くと、席に案内された。通いなれていたので、メニューを見るのもそこそこに店員を呼んだ。ハンバーグセット、それと居座るためのドリンクバーを注文した。このファミレスは深夜まで営業している。家に一度帰ってしまうと、もう一度外出するのは親の目線とかいろいろ面倒だ。家には適当に理由をつけて、遅くなるとメールすればいい。まだ家に帰るわけにはいかない。栞里の未来を確かめるまでは。

出されたハンバーグを食べながら、美咲は考える。未だに美咲の頭の中には未来と思われる映像が移り変わりしていた。この事を美紅に伝えるべきだろうか？ 何かの役に立つかもしれない。とはいえ、未来がこんなにも移り変わっているという事は、美紅も必死で動いているという事だ、とりあえず様子を見ておこう。夜の八時その時間になっても栞里が助かる様子がなければ連絡しよう。

夜の七時半、もうそんな時間か。ハンバーグを食べ終えてしまった。まあまあおいしかったな、後はドリンクバーで粘らないと、そんなことを考えていた。

その時、今まで移り変わり、一つに定まらなかった栞里の姿が未来が、一つの未来に収束しようとしていた。その映像の中で栞里は笑っていた。次の映像では泣いて喜んでいて。そして、元気に走る栞里の姿が見えた。

よかった、ハッピーエンドだ、これですべてうまく良く。美紅の言葉通り。

ほっと胸をなでおろした。栞里の病気が治るシーンが見える。泣いていた。シーツに顔をうずめて、大きな染みを作っていた。良かったね、栞里。これで、いくらでも遊びに行ける、できなかったことが何でもできる。

アレ、何かおかしい。気付いてしまった。時間、場所、全てバラバラだけど色々な事が見えてきた。栞里の一生、美紅の一生、私の一生。その中に私の家族の姿はなかった。目の前の時間は飛び跳ねていた。過去へ未来へ、現在へ。

今、私の家には強盗が、そして家族が……。

私は家に帰る。そして、私は家族を失う。血まみれになった人、人、人。もう、今や私に家族はいない。全てが手遅れ。全てが事後。

いやああああ。叫びたかった。声が出なかった。私は机に突っ伏した。

プルルルル、携帯が鳴った。携帯を取る。表示には美紅の文字。

「美咲、成功したわよ。未来は変わった、大きくね。栞里はもう大丈夫」

その声はとてほか弱く、疲れ切っていた。

「美紅、美紅……」

話を聞いてよ美紅。ねえ、聞いてよ。

「今日は疲れたわ、私は帰って寝る。後は私が自分の行動さえ管理できれば未来が変わることは無い。だからあなたも安心して、今日は休んで」

「あ、あ」

「じゃあね」

ツー、ツー。

涙がほおを伝う。

どうして私が。私はただ、ただ、栞里を、助けたかっただけなのに。

何で？ 何でなの？ 全部うまくいくんじゃないの？ あなたが未来を変えたんでしょ。

美紅、あなたが私の、私の大切な人を……。

顔をあげると、袖が濡れていた。

ああ、私は泣いてたんだ。涙は止まっていた。

立ち上がって店を出る。雨が強くなっていた。

傘もささずに歩き出す。濡れるのも気にしないで。

「皆が幸せって、無いのね」

プルルルル

「あ、美紅？ ちょっと聞きたいことがあるの。いつものファミレスに、ええ、そうよ。九時にね」

「美咲ちゃん、こんにちわ」

「栞里～、久しぶり～」

私は全てを終えたのち、家に帰った。そして、やはり待っていたのは荒らされた家と、家族の死体と、絶望だった。私は親戚に引き取られた。

そして、栞里の病気は無事に治った。私の家族の命と引き換えに。そんな事栞里は知らない、知らなくていい。全て終わった、復讐も後悔も、悲しみも。もう、元の生活に戻っていい頃だ。

そして今、栞里の病気が治って、退院してきたので会いに返ってきたというわけ

だ。

町中の喫茶店。流石に、フォーチュンを使う気にはなれなかった。栞里はせっかくだからそこが良いと言ったけど、無理を言って変えてもらった。

「美咲ちゃんは、もう大丈夫？ その色々……」

「うん、気にしてないって言えば嘘になるけど、今はもう自分の中で折り合いつけてるから。変な気は遣わなくていいよ、それが一番つらいんだ」

「わかった。それにしても、美紅ちゃんも来れるとよかったのに」

「本当にな。それにしても美紅の奴、今頃どこにいるんだか」

「急にいなくなっちゃうんだもん。お礼もしたかったのに」

「そういえば、美紅から栞里に渡してほしいものがあるって預かってたんだ。栞里の病気が治ったら渡してほしいって」

そう言って、封筒を渡した。

栞里が封を開けると、中には一枚の紙が入っていた。何か書いてあるようだった。

「何が書いてあるの？」

「うん？ 『私は全部知っているから、君が後ろめたく思う必要はない。君と友達でいられて楽しかった』って」

「なにそれ？ 何か心当たりあるの？」

奇妙な文面、しかし、明らかに解る人には解る、書き方だ。だとすれば栞里は何か知っているのだろうか。普段通りニコニコしている栞里の顔からは何も読み取れ無い。

「うん。私ね、美紅ちゃんが未来が見えるって知ってたの。それに、未来を変えることが出来るのも。だからね、私美紅ちゃんと友達になったんだよ。多分そのことじゃないかなあ」

「栞里、一体どういうこと」

栞里の顔は変わらずニコニコしていた。その表情に後ろめたさを見て取ることはできなかった。

「だから、美紅ちゃんに病気を治してもらうために友達になったの」

「どうして、そんな。美紅とは友達じゃなかったの？ 私たち三人、親友だったはずよ」

「ええ、そうよ、親友よ。楽しかったわ、本当に」

栞里はもう笑っていなかった。栞里のこんな表情は見たことがなかった。目を大きく見開いて、口元にうすすらと笑みを浮かべ、首を傾けてこっちを見ていた。「私は間違っていない。あなたの言葉は届かない」表情が語っていた。

「一度死にかけてみれば解るわよ」

栞里がわからない。今まで見てきた栞里は誰だったんだろう。それほどまでに、私の中の栞里のイメージはぐちゃぐちゃになっていた。

美紅も美紅だ。美紅も知っていて、あの関係が続けていたんだ。全てを知っていて。一体どうして？

「栞里、最後に一つ聞いていい？ 何で美紅はあなたが近づいてきた理由を知っていて、あなたを受け入れたの？」

「美咲ちゃん、美紅ちゃんに未来が見えるって言われて、色々見せられたでしょ。その時どう思った？」

いつものニコニコしている栞里に戻っていた。

「それは、その」

「『気持ち悪い、こんな人と一緒にいて大丈夫なのか』」

私は何も言えなかった。

「そういう事よ、誰にも言えない秘密って辛いものでしょう。美咲ちゃんもわかるんじゃないかな」

何のことを言っているのか。もう、栞里と話していたくなかった。頭の中がぐちゃぐちゃだ。

「今日はありがとう、私はこれで失礼するわ。さようなら」

一刻も早く逃げ出したかった。

「さようなら、美咲ちゃん。もう会う事は無いでしょうね」

私は早足にその場を去った。

遠くでサイレンの音が聞こえた。

美紅、私は一体どうしたらよかったのかな？ どうしたら、皆幸せでいられたのかな。

何も知らずにいられたらよかった。栞里の本音も、美紅の事も、何もかも……。

[戻る](#)